

Health

News for your life from
Yamagata University Hospital



山形大学病院ニュース

Safety

第16号

2008年2月

●山形大学医学部附属病院ホームページアドレス
www.id.yamagata-u.ac.jp/MID/index.htm

よりよい病院を目指してー

高次脳機能障害科の開設に際して

高次脳機能障害科教授 鈴木 匡子



2007年4月に山形大学医学部附属病院に高次脳機能障害科が開設されました。高次脳機能障害とは、病気や外傷などによる脳損傷が原因で、言語、行為、記憶、遂行機能などの認知機能が障害されることをいいます。脳の多くの部分が高次脳機能に関わっており、脳の部位によって、それぞれ別の高次脳機能を司っています。したがって、脳のどこが損傷したかによって、障害される高次脳機能は異なります。高次脳機能障害にはいろいろな症状があり、患者さんによって違うと言えます。

高次脳機能障害は、外から見えない障害です。つまり、外見上は普通の人と変わりませんし、歩くこともできます。しかし、ひとたび自分の力だけで行動しようとする、多くの困難にぶつかります。例えば、失語症の患者さんは、耳は聞こえるし、声は出せるにもかかわらず、人の言うことが理解できず、自分の思いを人に伝えることができません。記憶に障害があると、自分がさつき何をしてたのか、これから何をしようとしたのかさえ忘れてしまうことがあります。

高次脳機能障害をおこす病気は様々です。高齢者で多いのは脳血管障害で、麻痺や感覚障害といった神経症状に加えて、失語症（言語の障害）、半側空間無視（注意の障害）、失行（行為の障害）などが出現します。片麻痺のリハビリテーションを行う場合にも、合併する高次脳機能障害が大きく影響します。若年者で問題となるのが、交通外傷をはじめとする頭部外傷です。頭部外傷後、身体的にはよく回復しても、いざ学校や社会にもどって生活しようとする、高次脳機能障害が大きな問題になることがあります。交通外傷の場合には特に前頭葉機能が障害されることが多く、遂行能力の低下や、意欲の低下、状況にあっ

た行動がとれないなどの症状が目立ちます。高次脳機能障害は昔からあった障害です。ただ社会的に認知されず、それが大きな問題として取り上げられることもありませんでした。現在、成人の障害者として厚労省の支援の対象になっているのは、肢体不自由、視覚障害、聴覚・平衡機能障害、音声・言語・咀嚼の障害、心疾患などの内部障害、精神障害です。失語症を除く高次脳機能障害は、そのいずれにもうまくあてはまらないため、社会的支援が受けられない状態が続いてきました。自賠責保険が交通事故後の高次脳機能障害を認定したことをきっかけに、厚労省は平成13年度から18年度まで高次脳機能障害支援モデル事業を施行しました。平成19年度には各県毎の高次脳機能障害支援普及事業が始まりました。山形県もやっとスタートラインに立った状態です。

高次脳機能障害の治療は、障害の内容を正確に診断するところから始まります。脳損傷の程度、障害の質的内容と重症度、合併症などを総合的に判断して、治療方針を決定します。まず、患者さんの高次脳機能障害の中心を、ご本人とご家族によく理解していただき、適切な対応の仕方をお伝えします。そして、リハビリテーション施設、福祉施設、職業訓練施設などへの橋渡しをすることになります。このようなネットワークがうまく機能するためには、全県的な取り組みが必要となり、各種の方の連携が欠かせません。山形県健康福祉部が中心となり山形県障害福祉計画（第1期）が策定されました。今後、この枠組みの中で、高次脳機能障害を支援する事業が具体化していくものと考えています。本院も地域と連携して高次脳機能障害者の支援を続けていきたいと思いますので、関係する皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

石坂公成米國ラホイヤーアレルギー免疫研究所名誉所長（山形県教育委員会委員長）の講演会を開催

山形大学医学部では地域医療を担う医療従事者養成、教育者・研究者養成の在り方など、今後の医学教育者の資質の向上を図るために年数回にわたり「生涯教育セミナー」を開催しています。5月8日には第15回生涯教育セミナーとして、免疫学の世界的権威である米國ラホイヤーアレルギー免疫研究所名誉所長、山形大学客員教授、山形県教育委員会委員長の石坂公成氏を講師として開催されました。



講演する石坂先生

石坂氏は1966年に照子夫人との共同研究により発見したアレルギーの原因となる免疫グロブリン（IgE）を発表し、長年、米國を基点に研究活動を行ってこられました。その経験から、米國と日本の研究費の獲得方法や大学院教育の違い、基礎研究と臨床研究の連携による共同研究の重要性についてなど、貴重な経験を話していただき、教職員をはじめ学生も熱心に聞き入っていました。



熱心に聞き入る参加者

教官人事

本学の竹石 恭知 准教授（内科学第一講座）が平成20年3月1日付で福島県立医科大学の教授に昇任されました。

平成19年度 医学教育等関係業務 功労者表彰受賞

医学又は歯学に関する教育、研究若しくは患者診療に係る補助的業務に関し顕著な功労があった者として、11月29日（水）東京にて行われた表彰式で、次の両名が文部科学大臣の表彰を受けました。

結城 多喜男
材料部医療機器操作員
（材料部業務に尽力）

原田 恵美子
附属病院看護師
（看護業務に尽力）

春の叙勲

平成19年春の叙勲の受賞者が発表され、本院関係者では次の方が受章されました。

瑞宝双光章

元山形大学医学部附属病院看護部長

長岡 榮子

国立東京第二病院（現：国立病院東京医療センター）及び本学医学部附属病院等において、永年にわたり看護業務に精励されました。看護体制の整備や院内感染対策など病院の管理運営に貢献するとともに、人材育成に尽力されました。



大学院医学系研究科が、 がん治療専門家養成に 関する協定を締結

10月16日、本学医学系研究科は、東北大学、福島県立医科大学と共に、がん治療専門家養成に関する協定を締結しました。3大学は、東北が北でのがん医療のレベル向上を目指す「東北がんプロフェッショナル養成プラン」(国のがん対策：文部科学省の平成19年度予算・がんプロフェッショナル養成プランに採択)をスタートします。

3県の大学病院と全てのがん診療連携拠点病院が参加して、がん医療人を育成するほか、大学、病院、自治体、職能団体が一体となって臨床試験・がん登録を推進する地域の枠組み構築を計画しています。

学生の受け入れは平成20年度から、大学間単位互換、大学・病院間連携、インターネッス・クルの活用、社会人入学の推進など、従来の大学院教育の枠組みを超えた広域プロフェッショナル養成システムとなります。



がんセンター講演会を開催

山形大学医学部・附属病院では、平成20年1月15日(火)に、医学部教職員、附属病院の医師及び看護師等を対象に、重イオン線治療に対する理解を深め、がん治療の重要性を認識することを目的に講演会を開催しました。今回は、独立行政法人放射線医学総合研究所 重粒子医学センター病院長 溝江 純悦氏による「重イオン線治療の現況」の講演が行われ、約250名の参加者が、充実した内容の講演に聞き入りました。

山形大学 21世紀COEプログラムの 研究成果について

理事/副学長
河田 純男



山形大学医学部から提案した「地域特性を生かした分子疫学研究」は平成15年7月に21世紀COEプログラムに採択されたことは皆様ご承知のことと思います。このプログラムは5年間かけて世界的な研究教育拠点(COE: センター・オブ・エクセレンス、卓越した拠点)の形成を文部科学省が国家プロジェクトとして支援するものです。

このプロジェクトは今年度が最終年度になり、現在、3つの内科、公衆衛生、脳神経外科、眼科、産婦人科などを中心とした各分担研究者は連携して最終報告に向けて研究を進捗させています。この成果を広く内外の研究者に知らせるため、昨年9月6・8日(木・土)に山形テルサで分子疫学研究に関する国際シンポジウム「The 21st Century COE Program International Symposium」を開催しました。海外から3人および国内から5人の第一線の研究者を招待して講演をいただき、併せて学内のCOE分担研究者が成果を発表して、国際交流を行いました。このシンポジウムの重要な目的がもう一つあって、嘉山孝正COE統括委員長(医学部長)の発案ですが、大学院生や助教などの若手研究者が内外の研究者と率直に討論し、国際的な学術交流の場に慣れる機会を与えようというのがその狙いです。

山形大学医学部のCOEプログラムでは、若手研究者の育成に力を注いでおり、COEリサーチアソシエイト(毎年10名程度)を採用し給与を支給するとともに、COE研究奨励金(毎年大学院生10名程度)を授与しています。これらの採用にあたってはCOE統括委員会(嘉山医学部長、山下病院長、加藤丈夫教授、河田)により厳正に審査し、研究奨励金については研究報告を義務づけており、毎年成果が報告されています。今年度は数名を国際学会や米国ユタ大学研究所との国際交流に派遣する予定になっています。

分子疫学研究では、平成16年より高畠町の絶

大な協力を得て、「高畠がん健診」を行い、数千人からDNAサンプルの提供をいただいています。現在、パーキンソン病、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、糖尿病、糖尿病性網膜症、慢性腎疾患、脂肪肝、C型肝炎などで、成果が挙がっています。これら疾患の中で新しい原因候補遺伝子がいくつか発見されてきており、特許の申請も3件に上っています。とくに、パーキンソン病では創薬に向けて製薬企業との共同研究が順調に進んでいます。研究論文も今年度末までに数十編が出版・投稿される予定になっています。

このような成果が上がつているのは、学術的にはCOEアドバイザー・ボードである石坂公成客員教授(学士院会員、文化勲章受賞者)、坪井昭三元学長の御助力、健診事業に関しては看護部、技術部、事務部の多大なご支援など、附属病院・医学部を挙げたサポート体制のおかげであり、この紙面をお借りして深甚の御礼を申し上げます。さらに、今年度から新たな、より規模の大きいGlobal COEが公募されますが、この獲得に向けて統括委員会を中心に準備を進めているところであります。



人間性豊かな信頼の医療

メデイカルスキルアップ
ラボラトリーが開設

総合医学教育センター 佐藤 慎哉

この度、医学部共通棟・臨床講義棟内に「メデイカルスキルアップラボラトリー」が開設されました。メデイカルスキルアップラボラトリーとは、医療用シミュレーターを用いた疑似臨床実習を行う施設で、平成18年度特別教育研究経費「6年一貫教育のclinical clerkship充実のための集学的・総合的教育システム」により整備されたACLSトレーニングシミュレーター、乳幼児医療シミュレーターを始め、超音波トレーニングシミュレーター、気管支・消化管内視鏡シミュレーター、触覚機能付き内視鏡外科手術トレーニングシミュレーターなど世界最高水準のシミュレーターを揃えています。そのうちのいくつかをご紹介しますと、超音波トレーニングシミュレーターは、世界で唯一トレーニングカリキュラムを持つ超音波検査（超音波エコー）シミュレーターでオリエンテーションから走査実習、実習内容の評価が可能で、人体データから得られた3次元コンピュータ画像をベースにハプティック（触覚）インターフェースのハードウェアで構成され、臨場感あふれるトレーニングが可能です。内視鏡外科手術トレーニングシミュレーターは、腹腔鏡の基本スキルから腹腔鏡下手術手技の実践的トレーニングまでをカバーする専門的技術訓練用シミュレーターで、こちらも高い水準のハプティックシステムにより実際の手術手技における視覚と触覚の疑似化がなされています。これらのシミュレーターには、関係する診療科にご協力いただき、それぞれにインストラクターを配置しています。医学部学生はもちろん専門医をめざす医師まで、それぞれのニーズに対応したトレーニング環境を提供できるものと期待されます。

ご承知のとおり現在の医学教育に於いて臨床実習はきわめて重要であり、医療チームの一員として診療に参加し、医療に必要な態度や技能を自ら習得するためにクリニカルクラッシュ



ACLSトレーニングシミュレーターによる研修風景



テープカット（左から）山下事務部長、倉賀安教授臨床研修センター長、岡山医学部長、本館教務委員会委員長、佐藤総合医学教育センター長

病院経営改善の取り組み

赤字の船出

当時の嘉山病院院長から副院長を拝命し、経営を担当するように申し渡されたのは平成14年6月のことであった。病院が2億円に近い赤字という状況で、どうしたらよいのか暗中模索の時期であった。国立大学病院の独立法人化が具体化しつつあり、それまでの2年間に黒字に転化する必要性に迫られていた。赤字の原因を分析している過程でわかったことは、予算制度の矛盾である。どれだけ収入を増やしても、医療費率が高いと赤字が増大する仕組みだったのである。医療費率の削減を最大の目標において、全国に先駆け「経営改善ヒアリング」を開始した。その結果、各講座からの委任経理金に手をつけることなく、平成14年度の1年間で赤字を解消することができた。快挙である。平成15年度には5千万円の黒字を計上し、機器整備、在庫の備蓄を行えた。

独法化とDPPC

平成16年4月、大学は独立法人化し、病院には運営交付金との引き替えに年2%の効率化係数が科せられることになった。同時に、包括医療制度（DPPC）が導入され、病院の経営環境が大きく変化した。しかし、病院経営に関しては不透明な部分が多く、急激な方針転換は得策ではないと判断した。良心に基づく適切な医療を推進することを前提に、緩やかな右肩上がり増収を目指すことにしたのである。平成16年度は、運営交付金8千5百万円で、設備投資に1億4千4百万円を投入、3億8千6百万円を繰り越すことができた。平成17年度には運営交付金が0となったが、設備投資に2億8千万円を投入、1億2千3百万円を繰り越した。独立法人化後の2年間、病院経営は極めて順調だった。

診療報酬の削減

平成18年度、病院の経営基盤を揺るがす事態が発生した。診療報酬の3.1%減である。これに加えて、当院では病院再整備のための病床数減少が控えていた。病床稼働率の確保と診療単価の上積み以外に、打開策は見あたらない。断続的にヒアリングを行い、病院の窮状をご理解頂くことに努めた。その結果、平成18年度は111億円という本院過去最大となる診療報酬

副病院長
細矢 貴亮

請求金額を計上し、東北・北海道地区最大の入院部門、外来部門とも東北地区で記録した。入院部門、外来部門とも東北地区で最大の診療単価上昇率を達成できたことによる。皆様方のご協力の賜である。しかしながら、病院は厳しい経営環境に直面している。繰越金がなく、単年度では実質的に繰越金分が赤字になったからである。設備投資は、平成17年度に決まっていた3千3百万円を加えて5千9百万円が執行できたのみであった。ほとんどできなかったに等しい。3.1%の診療報酬削減がなければ、設備投資と繰越金に更に3億4千万円強が回っていたはずである。

病院の現状

国立大学附属病院は、将来の医療を担う医療人の育成、医学研究の推進と医療技術の向上、地域の中核病院として専門性を有した質の高い医療の提供を使命としている。本来、利潤を追求するものではないはずである。しかし、当然必要となる設備や人員についても、国立大学法人の裁量に任されている。利潤を上げ、自ら整備することが求められている。本院では、物流システムの外注化（SPD）をはじめとして、経費削減や増収が期待できる施策を積極的に取り入れていく。一方で、医療安全に必要な人員や増収を期待できる部署への人員を配備してきた。7対1看護に対応するための、看護師増員も達成できている。病院の必要経費は、年々増加の一途である。

今後の展開

平成19年度はどうなるのであろうか。このまま行けば、設備投資ができずに、1億数千万円の赤字を計上せざるを得ない。皆様方には、更なる経費削減の徹底と診療単価の上積みをお願いしたい。設備投資や人員配備を行いつつ、一丸となつてこの苦しい時期を乗り越えたいと願っている。今後、病院再開発による病床の減が続き、再開に伴う財務センターからの借入金への償還等が始まる。更に厳しい財務状況が続くかもしれない。病院自体が疲弊してしまわないよう事務方と協力しながら、最善の方策を講じる所存である。今後とも皆様方のご協力を切にお願い申し上げる次第である。

病院再整備の現状

病院再整備担当
久保田 功

現在、医学部附属病院は開院から30年の年月を経て、生まれ変わろうとしています。平成16年6月に附属病院再整備プランニング委員会から発行された「山形大学医学部附属病院再整備計画」が、現病棟の南側に

「形」となり、平成18年2月の鉄入れから、1、430㎡、約250床の新病棟が昨年12月に引き渡される段階にまで漕ぎ着けることができました。

新病棟は、前出の「山形大学医学部附属病院再整備計画」にも詳細に記載されていますが、「患者中心の環境整備」を計画評価の中心に据え、病棟と中央診療部門間の導線、看護導線の短縮、共通部分の集約等を念頭に置いて、稼働病床のすぐ南側に平行して建築するという、全国でも類を見ない増築棟配置の手法が取られました。工事開始から現在まで、違つ配置方法を選択していれば、防げたかも知れない騒音問題、粉塵問題等、患者さんや病院スタッフに多大な迷惑をかけながらも大きな問題もなく遂行できていることに対しては、感謝に耐えない気持ちです。昨年夏には新病棟と既存棟の接続工事が開始され、冬の寒さが厳しくなる昨年末には、新病棟と既存棟の往来も可能となり、新病棟及び拡充された手術部の全貌と刷新された救急部の中枢部が目の前に姿を現す予定です。

新棟部分の開院については、平成20年7月に照準を合わせ、部門毎の移転・引越ワーキングを発足させ動き出したところで、

病院再開関係業務もいよいよ正念場を迎えることとなります。今後、移転をイメージした引越のためのシミュレーション、新棟（建物）そのものに対する習熟訓練、本年3月に納品完了を予定している手術装置の習熟訓練等、現場実務を重ね、混乱のない開院を迎えるために、病院全体が一丸となって、作業を進める必要がありますので、更なるご協力をお願いいたします。

また、現在、整備計画Ⅰ期として、20、320㎡の既存東・西病棟、移転後の手術部跡地へ配置するHCU・ICU、材料部の移転とその跡地利用等について、設計業者による基本計画が進行していますが、部門毎のヒアリング等、設計業者との摺り合わせが頻繁に発生することとなります。非常に忙しい業務を押して協力をお願いすることとなりますが、再整備計画の目標ともなった「患者中心の質の高い医療を提供する」実現に向け、よろしく願います。

現在の整備計画Ⅰ期の終了後は、平成23年から平成25年までの整備計画Ⅱ期において、9、390㎡の外来診療棟、9、380㎡の中央診療棟の改修が予定されています。5年以上も先となる完成までは、さまざまなハードルを乗り越えなければなりません。ハード・ソフト両面とも世界最高水準の、自然と「人」が集まるような素晴らしい病院を目指しています。

研修医マッチングの結果（参加病院の所在地による全国分布）

都道府県	平成19年		平成18年		マッチ者数増減 ①-②
	募集定員	マッチ者数①	募集定員	マッチ者数②	
北海道	504	325	537	300	25
青森県	113	62	118	61	1
岩手県	112	59	106	56	3
宮城県	189	121	174	105	16
秋田県	133	62	127	59	△7
山形県	112	63	112	71	△8
福島県	144	77	139	82	△5
茨城県	176	120	168	117	3
栃木県	174	132	169	128	4
群馬県	158	87	155	95	△8
埼玉県	306	191	284	204	△13
千葉県	400	304	399	283	21
東京都	1,582	1,371	1,538	1,385	△14
神奈川県	750	598	734	593	5
新潟県	156	73	176	70	3
富山県	117	50	112	54	△4
石川県	139	88	133	82	6
福井県	86	59	83	55	4
山梨県	89	52	87	48	4
長野県	204	107	197	110	△3
岐阜県	170	100	182	106	△6
静岡県	268	163	257	168	△5
愛知県	707	497	673	510	△13
三重県	154	82	152	74	8
滋賀県	108	85	107	80	5
京都府	353	288	339	301	△13
大阪府	860	644	834	635	9
兵庫県	420	333	401	313	20
奈良県	130	77	136	80	△3
和歌山県	109	78	104	76	2
鳥取県	70	30	70	28	2
島根県	95	40	90	51	△11
岡山県	227	158	219	157	1
広島県	228	144	227	142	2
山口県	136	63	125	70	△7
徳島県	84	55	78	42	13
香川県	100	59	95	61	8
愛媛県	127	71	125	79	△8
高知県	86	42	93	49	△7
福岡県	604	454	590	512	△58
佐賀県	77	55	77	47	8
長崎県	154	71	144	99	△28
熊本県	154	104	149	118	△14
大分県	110	56	108	67	△11
宮崎県	70	46	70	44	2
鹿児島県	143	74	135	72	2
沖縄県	175	150	178	145	5
計	11,563	8,030	11,306	8,094	△64

平成19年度 東北地区大学病院及び

山形県内研修病院のマッチング状況

病 院 名	定 員	マッチ者	空き定員	定員充足率
弘前大学医学部附属病院	40	11	29	0.28
岩手医科大学附属病院	35	13	22	0.37
東北大学医学部附属病院	40	21	19	0.53
秋田大学医学部附属病院	43	14	29	0.33
山形大学医学部附属病院	50	25	25	0.50
福島県立医科大学医学部附属病院	44	15	29	0.34
山形大学医学部附属病院	50	25	25	0.50
山形県立中央病院	12	12	0	1.00
山形市立病院済生館	10	9	1	0.90
済生会山形済生病院	8	2	6	0.25
公立置賜総合病院	4	1	3	0.25
米沢市立病院	4	3	1	0.75
山形県立新庄病院	4	3	1	0.75
医療法人徳洲会 新庄徳洲会病院	2	0	2	0.00
鶴岡市立荘内病院	5	4	1	0.80
山形県立日本海病院	5	3	2	0.60
市立酒田病院	2	1	1	0.50
医療法人社団山形愛心会 庄内余目病院	4	0	4	0.00
山形徳洲会病院	2	0	2	0.00
山 形 県 合 計	112	63	49	0.56

研修センターだより

(19.5.1~20.1.1)

イベント

ハートフルコンサートを開催

12月13日(水)、外来玄関ホールにおいてハートフルコンサートを開催しました。このコンサートは、山形大学医学部の学生を中心とした医学部室内合奏団、医学部合唱団らが、医学部附属病院に入院中の患者様を対象に平成7年から継続的に開催しているもので、今回で23回目。「名探偵コナンメインテーマ」をオープニングに「津軽海峡・冬景色」「世界に一つだけの花」など全7曲を披露しました。約1時間のプログラムは、盛況のうちに終了し、アンコールも飛び出すなど患者様はじめご家族の方々、病院関係者約300人が楽しい時間を過ごしました。



イベント

"感動"の「ふれあい看護体験」

5月12日のナイチンゲール生誕の日にちなみ、前後1週間を「看護週間」とし全国で様々な取り組みやイベントが行われています。「ふれあい看護体験」はその一環として高校生の進路相談や職場体験と連動し、写真展なども行われている事業です。当院では県内の高校生10名を受け入れ、病棟での体験学習を行いました。

最初に山下病院長のご挨拶があり、ナイチンゲールの業績を含めた看護への期待について話され、続いて看護部長より研修生への励ましの言葉がありました。

各病棟ではユニフォーム姿も初々しく、車椅子移動、爪切り、洗髪、足浴など看護師とともに初体験にチャレンジ。自分がやるようにはいかないと苦心しながらも、患者様に「ありがとう」「気持ちよかった」と言われたという満足げな表情が印象的でした。学校では学習できない有意義な体験という感想や、医療系への進学希望がより強くなったという意見もあり、患者様との会話が重要で、そばに居ることだけでも患者様の安心につながると気づいた感性には、すでに看護師の素質十分であると頼もしく感じました。

この「ふれあい看護体験」で医療、看護の仕事のアピールと、後輩育成につながることを期待しています。



イベント

地域教育文化学部によるコンサートを開催

10月17日(水)、地域教育文化学部の3年生6名が授業の一環として、外来受付ホールにおいてクラシックコンサートを開催しました。

授業の名称は「地域音楽活動実践論」、アウトリサーチとよばれる音楽の出前演奏です。今回は、附属病院に入院中の患者様に幅広く音楽にふれていただくことを目的に、学生たちによるフルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットの演奏が披露されました。

学生は文化創造学科の音楽芸術コースに所属しており、3年生を対象としたこの授業では、既に町中や小学校などで7回もコンサートを行っています。この日は会場に集まった患者様ら約100人を前に「もっと身近にクラシック」のタイトルで「大きな古時計」「四季のうたメドレー」など全5曲を披露しました。



行事

山形大学生命・環境科学交流セミナーを開催

7月31日(火)、山形大学医学部では、山形医学交流会館(飯田キャンパス)において、理学部・医学部・工学部・農学部による「第5回山形大学生命・環境科学交流セミナー」を開催しました。

この交流セミナーは、「生命科学、環境科学に関する研究者の交流を促進し、世界的な研究の推進、発信を期する。」ことを目的に4学部が輪番により年3回程度開催しているもので、医学部主催により開催された今回は約100名が参加しました。

開会にあたり、嘉山医学部長から「これを契機に4学部の学術交流が益々盛んとなり、共同研究により大きな研究成果がうまれることを期待する」旨の挨拶があり、鈴木匡子教授(医学部)の基調講演を皮切りに、西田雄三教授(理学部)、野々村美宗准教授(理工学研究科)、野堀嘉裕教授(農学部)による3題の一般講演が行われました。活発な質疑応答により、セミナーは3時間を超え、盛況のうちに終了しました。



司会を務められた
山下病院長と
挨拶をする
嘉山医学部長

基調講演を行う
鈴木教授
(医学部)

行事

三浦医学教育課長の講演会を開催

山形大学医学部では地域医療を担う医療従事者養成、教育者・研究者養成の在り方など、今後の医学教育者等の資質の向上を図るために年数回にわたり「生涯教育セミナー」を開催しています。12月11日には第17回生涯教育セミナーとして、文部科学省高等教育局医学教育課長の三浦公嗣氏を講師に迎え、「医師の養成と大学医学部の役割」と題して講演会が開催されました。

三浦医学教育課長は、厚生労働省が昨年出した「医師不足は特定地域・診療科の医師偏在が問題」、「2022年度には、日本全体の医師数は需要と供給が均衡する」とした見通しに関し、必要医師数の算定方法が勤務医の現状を反映していないなどの問題点を指摘し、「それでも十年以上は医師不足が続く上、全体の需給バランスが整っても、医師偏在のない完全な配置の調整は困難である」と強調されました。医師不足の対策としては、来年度より県内外の医療機関と大学とで広域的に医師を循環させながら、養成・教育するシステムを作り、医師不足解消を図る取り組みを始めることと、医学部定員の暫定増などを認めた「新医師確保総合対策」、「緊急医師確保対策」を挙げながら、地元定着率の高い「地域枠」入試の推進を訴えられ、参加者は熱心に聞き入っていました。



イベント

山形西高音楽部によるコンサート開催

12月25日(火)病院6階病棟エレベータホールにおいて、山形西高音楽部合唱団の生徒13名による合唱コンサートが開催されました。

山形西高音楽部では、日頃から地域に根ざしたボランティア活動を行っており、今回もその活動の一環として、合唱部からコンサート実施についての申し出があり実現したものです。

この日は「あわてん坊のサンタクロース」「赤鼻のトナカイ」などのクリスマスソングを踊りを交えながら小児科病棟の患者さまに披露。会場の患者様らには、素敵なクリスマスプレゼントとなりました。



(19.4.1~20.1.1)

19	4	1	(東北大学病院「ハビリテーション」部講師)
19	4	1	鈴木 匡子 採用 教授 高次脳機能障害学講座
19	4	1	(北里大学看護学部助教)
19	4	1	田中 幸子 採用 教授 基礎看護学講座
19	4	1	(福井大学医学部看護学科教授)
19	4	1	細谷たき子 採用 教授 地域看護学講座
19	4	1	佐藤 慎哉 配置換 教授(脳神経外科学講座)
19	4	1	教授 神経機能再生学講座(精神看護学講座)
19	4	1	講師 第二外科 大泉 弘幸 昇任 准教授 器官機能統御学講座
19	4	1	[循環器・呼吸器・小児外科学分野] 外科第二講座
19	4	1	講師 耳鼻咽喉科 小池 修治 昇任 准教授 情報構造統御学講座
19	4	1	[耳鼻喉・頭頸部外科学分野] 耳鼻喉科科学講座
19	4	1	(東北大学病院助手) 横山 浩之 採用 准教授 臨床看護学講座
19	4	1	(山形県健康福祉部) 佐藤 正幸 採用 准教授 医療政策学講座
19	4	1	助手 器官機能統御学講座 蜂谷 修 昇任 講師 第一外科
19	4	1	[消化器一般外科学分野] 外科学第一講座
19	4	1	助手 器官機能統御学講座 江村 隆起 昇任 講師 第二外科
19	4	1	[循環器・呼吸器・小児外科学分野] 外科学第二講座
19	4	1	助手 情報構造統御学講座 那須 隆 昇任 講師 耳鼻咽喉科
19	4	1	[耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野] 耳鼻咽喉科科学講座
19	4	1	助手 環境病態統御学講座 本間 次男 昇任 講師 放射線診断科
19	4	1	[映像解析制御学分野] (放射線医学講座)
19	4	1	助手 医療情報部 高橋 和榮 昇任 講師 医療情報部
19	4	1	(山形県立河北病院 磯部 秀樹 採用 講師 第一内科)
19	4	1	講師 第一外科 平井 一郎 配置換 講師
19	4	1	器官機能統御学講座(消化器一般外科学分野) 外科学第一講座
19	6	1	講師 器官機能統御学講座 吉村 幸浩 配置換 講師 第二外科
19	4	1	[循環器・呼吸器・小児外科学分野] 外科学第三講座
19	4	1	看護部 副看護部長 大合 和子 昇任 看護部 看護部長
19	6	1	(東北大学加齢医学研究所協化学療法研究分野准教授)
19	6	1	古岡 孝志 採用 教授 器官機能統御学講座(臨床腫瘍学分野)
19	6	1	助教 発達生体防衛学講座(感染症学分野)(細菌学講座)
19	6	1	松崎 葉子 昇任 准教授 皮膚科学分野(皮膚科学講座)
19	6	1	助教 情報構造統御学講座(皮膚科学分野)
19	6	1	川口 雅一 昇任 講師 皮膚科
19	6	1	助教(環境保全センター) 土橋 陸夫 昇任 講師 環境保全センター
19	6	1	(山形大学医学部非常勤講師) 北中 幸子 採用 講師
19	6	15	准教授 発達生体防衛学講座(小児医科学分野)(小児科学講座)
19	6	15	手塚 尚広 退職(公立置賜総合病院へ)
19	6	16	講師 産科婦人科 中原 健次 昇任 准教授
19	6	16	発達生体防衛学講座(女性医学分野)(産科婦人科学講座)
19	7	31	助教 発達生体防衛学講座(女性医学分野)(産科婦人科学講座)
19	7	31	高橋 俊文 昇任 講師 産科婦人科
19	8	1	三橋善比古 退職(東京医科大学へ)
19	8	1	講師 発達生体防衛学講座(感染症学分野)(細菌学講座)
19	8	31	河田 純男 要請退職(本学理事へ)
19	9	30	講師 眼科 高橋 義徳 退職(開業へ)

an editorial postscript
編集後記

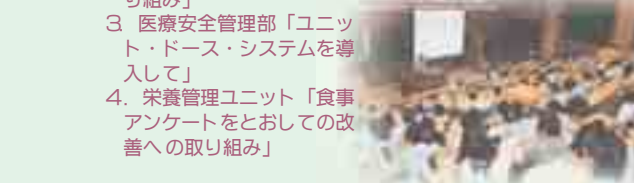
第号のヘルス&セーフティを皆様にお届けします。山形大学医学部附属病院に、高次脳機能障害科が開設され、鈴木匡子教授が着任されました。鈴木教授は山形大学医学部医学系1年初の女性教授であり、また本学出身（6期生）でもあります。本号では、高次脳機能障害の解説と障害者支援への取り組みが始まったことと紹介されております。山形大学医学部附属病院の診療体制の一層の充実が図られるものと期待されます。嘉山医学部長、山下病院長のリーダーシップのもとに、大学院医学系研究科にがん治療専門に、薬成システムのスタート、メディカルスキルアッププログラム、の開設など、専門医、家庭ケアや医学教育、卒後教育に関しても次々と新しい試みが始まっています。このことは、今年度の後臨床研修で、東北地区の大学附属病院は、最多のマッチング数を続けていることも反映されていると思います。また、山形大学医学部のCOEプログラムも着実に成果を遂げつつあります。病院再整備も着々と進んでおり、職員、関係者みなしてとところであります。最後に本誌の編集委員でもある竹石准教授、福岡県医科大学教授昇任の喜ばしいニュースを大きく

た。編集委員会（川勝 忍）

- ## PDCAサイクル発表会を開催

当日は、医療安全管理部を含めた4部署より事例発表があり、細矢医療安全管理部長が座長として盛り上げていただきました。発表会は、約210名の参加者を数え大変有意義な時間となりました。

題 目 1. 8階西病棟「投薬エラー防止のための取り組み」
 2. 手術部「良好なコミュニケーション作りにおむての取
 り組み」
 3. 医療安全管理部「ユニッ
 ト・ドース・システムを導
 入して」
 4. 栄養管理ユニット「食事
 アンケートをとおしての改
 善への取り組み」



発表事例 ユニット・ドース・システムを導入して
医療安全管理部 久下 敦子

平成17年度に入り、薬インシデントの増加が顕著となり、病院としてその対策が急務となりました。以前はインシデントが発生すると、その予防策として「このような事例があったので注意しましょう」などの注意喚起が中心でした。しかし、注意喚起には限界があり、常に同じ注意レベルを保つことは不可能に近いといわれています。そこで、シンプルで間違いにくいシステム作りについて検討しました。キーワードは「フルブルー」「エラーブルー」で、つまり『誰にでもできてわかりやすい方法』です。

各病棟では、いろいろな工夫を凝らしてと薬業務を行っていましたが、分析したところ、すでにユニット・ドース・システムを採用している病棟のインシデントが少ないことがわかりました。また、その工程も分析しましたが、ユニット・ドース・システムの利点は、薬を1回分ずつに分けて保管するためと薬直前の分包作業がないこと、と薬したかどうかの確認が一目瞭然であることであり、まさに『誰にでもできて分かりやすい方法』といえます。これらの分析結果をふまえ、全病棟にユニット・ドース・システムを導入しました。

ユニット・ドース・システム導入後は、平成18年度で月平均5件、平成19年度で月平均12件ずつと薬インシデントが減少しています。特に、経験年数1年目の件数が半減しており、ユニット・ドース・システムを導入した成果が証明されました。

医療安全管理部では、今後もPDCAサイクルを用いたシステムの改善を進めていきますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

